

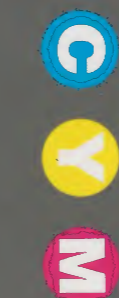
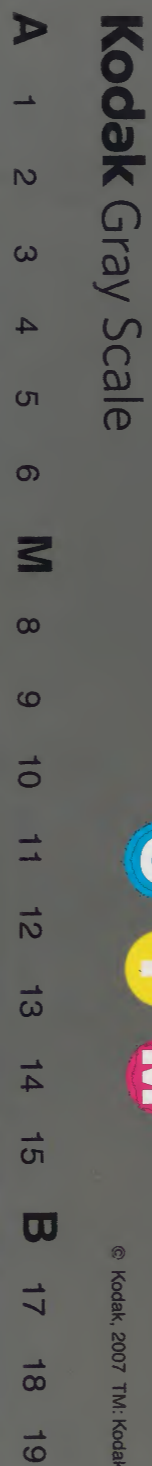
# 日本書紀

二十  
十一

| 大政官文庫 |   |   | 和<br>書<br>門 |
|-------|---|---|-------------|
| 二     | 一 | 九 |             |
| 〇     | 〇 | 二 |             |
| 冊     | 架 | 函 | 類           |

| 內閣文庫 |   |   | 和<br>書 |
|------|---|---|--------|
| 三    | 七 | 函 |        |
| 五    | 〇 | 架 |        |
| 冊    | 冊 | 架 | 類      |

| 內閣文庫 |           |
|------|-----------|
| 番號   | 和 8498    |
| 冊數   | 20 ( 13 ) |
| 函號   | 137 46    |



© Kodak, 2007 TM: Kodak



日本書紀卷之十

天皇

天皇

天皇

天皇

天皇

天皇

天皇

天皇



廣士氏藏書記



日本書紀卷第十九

淳中倉太珠敷天皇

淳中倉

太珠敷

天皇



敏達天皇

天國

排開

廣庭

天皇

の第二子なり母と石姫皇后とす

皇后ハ武十廣同押 天皇佛法と信す

皇太子とす

二十九年四月天國排開廣庭天皇崩

九年夏四月三月のえさの朝

皇太子 即天皇位

尊



皇太后とまうひこの月百済の大井宮つ  
まう治ぶ物部弓削守屋大連をみて大連と  
しりとのいこく獲我馬子宿禰をりて大連と  
し治ぶ五月うつのかつもの朔の日天皇皇  
と大臣とよふてのしちまく高麗の使人  
いさいほこも人へ大臣こくまうて  
さく相樂の館より人へ天皇さうりて  
いほし治ぶしちまくさよこ人ゆきてちけ  
佛剛 極 甚 慙 甚 欽  
ひてのしちまくのしちまくはほひる名を

て先考天皇のまうしきりめをれつちまう  
きまうちを相樂の館のまうしててまうれ  
ろまうし物を檢めんして京師まう  
見してまうしひのさの日の天皇高麗  
の表流をり治て大臣まうしちまうりりく  
の史をめつちまうてよこしちまうしこの時  
りりくめ史の日の内まうしちまうし家ま  
船史の祖王辰余く讀 撰  
あり是よりて天皇大臣ともまうしちまうし  
考讀券

こもしくつとめる辰余<sub>勤</sub>、辰余<sub>勤</sub>辰余<sub>勤</sub>辰余<sub>勤</sub>汝<sub>勤</sub>  
学<sub>勤</sub>にともとのつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
とらん<sub>勤</sub>宣<sub>勤</sub>いすしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
侍<sub>勤</sub>しきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
み<sub>勤</sub>ともつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
何<sub>勤</sub>ゆつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
し<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
の<sub>勤</sub>ともつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
ら<sub>勤</sub>じとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
辰<sub>勤</sub>余とつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
辰<sub>勤</sub>余とつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし

て帛<sub>勤</sub>とつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
う<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
六<sub>勤</sub>月高<sub>勤</sub>麗<sub>勤</sub>の大<sub>勤</sub>法<sub>勤</sub>を副<sub>勤</sub>使<sub>勤</sub>ら<sub>勤</sub>ひ<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめし  
磯<sub>勤</sub>城<sub>勤</sub>嶋<sub>勤</sub>天<sub>勤</sub>皇<sub>勤</sub>のお<sub>勤</sub>け<sub>勤</sub>ん<sub>勤</sub>と<sub>勤</sub>き<sub>勤</sub>汝<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめし  
と<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
を<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
あ<sub>勤</sub>は<sub>勤</sub>汝<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめしきつとめし  
我<sub>勤</sub>国<sub>勤</sub>王<sub>勤</sub>を<sub>勤</sub>け<sub>勤</sub>り<sub>勤</sub>し<sub>勤</sub>け<sub>勤</sub>り<sub>勤</sub>し<sub>勤</sub>き<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめし  
副<sub>勤</sub>使<sub>勤</sub>く<sub>勤</sub>ら<sub>勤</sub>う<sub>勤</sub>あ<sub>勤</sub>は<sub>勤</sub>ひ<sub>勤</sub>つとめしきつとめしきつとめしきつとめし

本國より人時大使者あやむるを  
是不祥事あり老いるよりして  
その口と断断人をおりよみつとらんと世ぬ  
大使これより衣帯ころもとよそひりてひと  
まらう潜行館の中庭庭よきてせん  
るし時賊一人あつて杖つゝとめて出さる  
て大使の頭あたまとらいていつとらぬ次賊一人あ  
つて直まよ大使よりつて頭と手とと打うて  
いてさうぬ大使とらいて地つちよきて面の血ち  
理然

とつふも賊一人あつて刃やいばをとらつて  
よ城つて大使の腕うでとらいてさうぬ  
時大使おそく地つちよきておひ後あと賊一人  
あつてさでよころいていつとらぬあらつあ  
まらう鎮容つとらぬ東漢の坂上直子麻  
呂等その由ゆを推おし問とぐと副使ふくしらと  
いつとらんとさうて云天皇書と大使さす  
る大使おけん勅とさ遠むきてさ不愛む礼れいる  
きことん甚こしさらんて臣おん本天皇のさあ

よころしめと有司禮を以てし秋七月  
高麗の使人よりりぬぬと大威  
壬辰

二年亥五月己のえとの朔つちのえとの日  
高麗の使人越の海の岸に泊る船よりて  
おほい死ぬる者おほいみししり路  
溺れしとてし給て郷食しるを以て  
精吉備海部直難波より  
放逐し高麗の使を送らしし秋七月

きのよのうしの朔の日越のうのほりより難  
波と高麗のつひらとあひ識りて  
つひ難波の私人大嶋首磐日狭丘首間狭  
よみて高麗の使の私よ葉しめ高麗の  
二人を以てしりつひの船よりしり  
のしりしとてしりつひの船よりしり  
るふりしとてしりつひの船よりしり  
俱時 祭礼 数里 許  
使難波より波浪を  
ねて高麗の二人を以てしりつひの船よりしり  
執 擲

八月きのしむかの朔ひのよひはりの日とらう  
つひ 難波くろしきもてしるしとせりして  
まゝく海表は鯨魚おほく<sup>未</sup> 舟と械擢<sup>復命</sup>  
ととととと 難波小舟の舟とのちんこととお  
そりてえまうそを天皇きこうめりてそのい  
はしりもをさうしめてはひの官を駈て  
国よゆ<sup>放還</sup> つひいさん  
三年夏五月かのしこうの朔きの日の高  
廉のはひ越のうまのほしうよとせり秋  
岸伯

七月つらのよひはりの朔つらのよひの日  
高廉のはひ京へ入てしりしてしりき<sup>高</sup>  
ホ去年とらうはひよあひ<sup>逐</sup>うて国よ  
まうあかつ。臣らとまきよ臣う藩よしりぬ  
臣うくよまひしり使人の礼よあま<sup>大</sup>鴻  
首磐日らと礼餐を高廉国王とたりて  
禮よあはくし礼うそ下りてそらうつひ  
の私いすよしりしりてしりてしりてしり  
そんで使人并磐日よとまうしりて臣使のき



あつてそれより請問難波がつまを救てのさしきく  
みもととあさむけ一也罪とめりめ使とあつて  
ころそ二也朝延よみ大治とめり罪ゆきつとみ人  
うひそめはきとささめん冬十月つちのし  
の朔ひのしきよの新獲我馬子大匠を吉備国  
よもして白猪の屯倉と田部とをせしめ  
ましとら田部の名籍とめて白猪史増益贍津よ  
ふまふつちのしぬの日舟史王辰余才牛

よみとのりして姓とめて津史とけり  
十一月新羅新羅使とめて調てし  
四年春正月ひのめつ新羅の朔きの日の息  
長真羊王のむさめ長真廣姫と立て皇后とけり  
是一男二女と生ませりその一と押坂  
度人大兄皇子度人とさうひその二と  
逆登皇女とせしめその三と菟道磯津貝皇  
女とせしめこの月一夫人と立て春日臣  
仲君のむさめ老女君夫人仲君の娘とまは

三男一女と生うまへその一と難波皇なみのみかど子と戸  
らそその二と春日皇かすかひのみかど子とまういその三と栗田くりだ  
皇女みかどめとまういそ其四と大流皇おほなみのみかど子とまうい  
次は采女うねめ任勢いにせ大麻首おほあしほ小熊こくまうむまのうむま兎名うねな  
子夫人むすめとまうい大姫皇女おほひめのみかどめと糠ぬか手て  
皇女みかどめ 田村皇女 とと生まうい二月ふたつきのの  
氏うぢの朔しつの日馬ひま子宿禰すくね大臣おほおみ京師きやうしののつらまう  
きて屯倉とんくらの事こととつらまういまういまうい  
しの日百濟ひやくさいの使つかひとまういて調しらとてまうい

多おほ治しののまういまうい天皇てんかう新羅しんらののい  
任那いにせとてまうい皇みかど子と大臣おほおみと  
みまうい任那いにせの事ことななおおこ  
交ま四月しがつののまういまうい朔しつののまうい  
日吉士ひよし金かね子こと使つかひとて新羅しんらの吉士よし木蓮きれん子こ  
使つかひとて任那いにせの吉士よし譚たん諾だく亥がいと使つかひとて  
百濟ひやくさいののまうい六月ろくがつ新羅しんらの使つかひとまうい  
てまういまうい多おほ治しのの例れいとまういまうい  
并な多おほ々々羅ら須す奈な純じゆん和わ陀だ發はつ鬼き四し色しきののまういまうい

してゆり...ト者...の...て海部

王の家地と縣井王の家地と...ト...

幸玉宮...禁古...宮と澤港田...言...

五年春三月つらのとよの朔つらのし杯の日

有司皇后ふして...み...

豊御食炊屋姫尊と立て皇后...は...

二男五女と生さ...一...荒道貝鯖皇

女...名荒道...東宮聖徳...嫁...

一...二...竹田皇...三...

小...皇女...是...人...大兄皇...嫁...

一...四...鷓鴣守皇女...名...皇女...

その五と尾張皇...其...六...田眼皇女

と...是...息長足日廣額天皇...嫁...

その七を横井...皇女...

六年春二月...朔...の日日記部私

部...おき...夜...五月...の...の...の...朔...

の...の...日...大別王...と...小黒吉士...と...

の...の...日...大別王...と...小黒吉士...と...

の...の...日...大別王...と...小黒吉士...と...

の...の...日...大別王...と...小黒吉士...と...

百濟國の事

王人おほんことうけこつて使とて三  
韓とてうけ稱て宰と八言ハ韓と宰  
うりきししうの曲いすに使と云  
餘これいふる大別王いおけ、西い  
ぬり

冬十一月かのむまの朔の日百濟国王  
使大別王おほりわら付て經論若干卷并律師  
禪師比丘尼呪禁師造佛工造寺工六人と

てまろはひ難波の大別王の寺とて

道

七年春三月はらのつこの朔のしうま

日菟道皇女うさみちみかひめとり伊勢の祠とて

池辺皇子いけのへみこ新あらたとあをれて解

八年冬十月新羅より根叱政奈未とて

てまろ調てまろ并佛像とてまろ

九年夏六月新羅より安刀奈未矢泊奈

未とまろてまろとてまろ納とて

かゝる

十一年春閏二月蝦夷救千代境は寇はな

ふそその魁師いさぎのし綾糟等あやうらうら魁師いさぎのしのりてみ

このころしてのりてみおのり人うまは倭蝦夷あはれき

大足彦天皇の世はころそくさといころ斬ころ原はらゆらむ

つきをいゆら流くういさ朕みまのこさの例れい

あつりてりつあさりのをころ人とおお

りこまは綾糟木おちりおこまをころころまはら

泊瀬の中流はおりて三諸岳はむらてらむら

そきてちりひてまきまき臣等おみら蝦夷あま

月つきはさき子孫うのゝつらつらお沿お生う児こハ十は錦にしん連づら清きよ

あきらりる心もて天あま願ねがは流ながるらん臣おみ

ホりちりひはさき天地あまつちの諸神もろがみをむ

天皇の靈たまは種たねをくけはけし流ながる

十一年冬十月新羅は安刀奈未矢あま消き奈な

未みとゆきて調しらべて納くるはむして

かゝる

十二年秋七月ひのよらりの朔の日みよ

我先考天皇の世にありて  
新羅内官家の國をほろぼす

天國排開廣度天皇二十三年任那新羅

のこめよほろぼす故新羅我内官家と

ほろぼすとのことなり

先考天皇任那とくんとをりて

こまきて明のそのこゝろをりて

いとよみ朕もきし神謀をいひきつて

して任那とくんとをりて百濟

火葦小國造阿利斯登子達率

日羅の買ひてあり故朕其人と

吉倫海部直羽鳥とて百濟の

冬十月紀國造押勝等百濟

朝よりくつて百濟國王

日羅の買ひてありて百濟

吉倫海部直羽鳥とて日羅と百濟

羽鳥とて百濟の之て先よひ

九

日羅とらんをよひてひらりまら家の  
門底（向）よきくありて家のうちり  
きりけり韓婦（韓）うきくありていつく汝  
根（根）とて我根の肉（肉）よ入（入）まひてまはら  
家（家）よらり羽嶋（羽嶋）をいさるそのころと覺  
て後（後）よらりて入ぬこと日羅むくきりて  
ま（把）とらりて座（座）よ坐（坐）しむひそ（告）て云僕  
ひそ（告）きりて百濟国王天朝（天朝）とらりてひ  
てまら。臣（臣）とまら。奉（奉）りてのらりてか

一し流（流）まらとよめよまらてまら  
てえりてまら宣（宣）の目（目）とせんときいほ  
く（巖）き色（色）とあ（宣）らりまら  
羽嶋（羽嶋）をいさるそのころと  
よのまら日羅をいさる百濟国王天朝  
よおちりてまらておほん（邦）とまら  
日羅（日羅）平徳（平徳）余怒（余怒）哥（哥）奴（奴）知（知）参（参）官（官）艳（艳）師（師）徳（徳）  
卒（卒）次（次）于（于）徳（徳）水（水）手（手）木（木）若（若）干（干）人（人）とてまら  
まら日羅（日羅）木（木）吉（吉）備（備）のこ（こ）まの屯（屯）倉（倉）よ行（行）い

朝廷大伴糠手子連さしとまじりてやめ

糸いととまじりてお雑雑波波の館館より

あして日羅日羅とまじりてあのとき日羅日羅

あひとまじりて門門のりりとまじりて

いらまじりてあの前前まじりてあまじりて

あつてあ欲欲恨恨てまじりてあ檜檜隈隈宮宮あめあのあ

あつてあ天皇天皇の世世我君大伴金村大連大連みみ

あつてあおほ人おほ人とまじりてあのあつりつり火火葦葦小国造小国造

刑部刑部朝部朝部百利斯百利斯登登之子之子臣臣連連平日羅天

皇のあはとうけあとまじりてあそれそれのあこまじり

あつてあまじりてあそれそれのあ甲甲とまじりてあ天皇天皇のあ

あつてあまじりてあ館館とまじりてあ市市のあいあつり

あつてあ日羅日羅とまじりてあ供供とまじりてあまじりて

あつてあまじりてあ阿倍目臣物部阿倍目臣物部贄贄る連連大伴糠

あつてあ手子連手子連とまじりてあ国国のあまじりてあ日羅日羅と

あつてあ日羅日羅とまじりてあ天皇天皇のあ天下天下と

あつてあまじりてあまじりてあまじりてあまじりてあ

あつてあまじりてあまじりてあまじりてあまじりてあ



つものをばらばらとてうしきひほるはしき  
 人故翻いさくしりしひとよのりしとてみし  
攝者臣連令二の造二造とい国トおほ朝刊  
仕奉むたさよをまつてとくよみなるをえん  
姓てまといろなるのめさくをらと三年饒百  
 むして食食兵兵をらひとめて民と  
 ろろ水火火をらひおほく国のまをひ  
 ろれえんとしてのら多多うよとほ  
恒里て津列とよあるおきて客人客人のめせりえ

つこころおそきことさきあき  
悲そひらきこころ使ひきめて百濟百濟つと  
 その国の王を未しりしきその太太佐平  
之王子ホを未あや未しりしきそのつと心よ  
欽つし伏しきかふことさきあきめてのらつとを  
 とひらふし又未しりして未しりし百濟人  
謀まがりて云云船船三言三言あきし筑紫筑紫を請まうし人  
 ありし實しりしき請さいゆ百陽しりし  
 てありた人あきしりしき百濟百濟あきしり

国をいつくさんとおぼひてかほをさす女メ人小  
子とのり舟よのせて国おこしむいひこの  
とき望ほつて壹岐はま多た伏兵ふくへいをおき  
てまういふとまうてころひさくころうて  
なあさむらひゆひを要害めまの所とま  
墨塞すみさをつきゆへとまうまこま 恩平おんへい 参官さんくわん 国  
よまう時よのそんで 旧木恩平として入こま  
ひそふ徳介とくけらまうつて云 昔つくつとま  
きゆく許ゆるととらうて汝なんホひそくよ日ひ羅らをこ

旧木恩平として入こま  
参官として一人とま

ろせ谷つごよ王子おんまうしてまよ高壽たかうと  
こまう一ひと身みとむ妻つま子こ榮えを後あとまう  
徳介とくけ余あ奴なままいいはは参官さんくわんホほひひよよ血ち  
鹿かよよちちららちちよよ日ひ羅ら 桑くわ市し村むらより雜ざ岐ぎ  
の館しやうよよううつつ 徳介とくけららひひららううくくととままううてて殺ころ  
さんとん時とき日ひ羅ら 衆しゆののひひららあありりてて火ひ焰えん  
ののととししこれこれよよまま 徳介とくけららおおままううててころころささ  
ままははひひよよ十二じふに月げつ晦みづかひひひららううままううててころころささ  
ええううはは日ひ羅ら 又またままううてて云いふふはは是こゝままうう

獲生

候

法しほのひひととやや法しほののららかかししききあありりてて新羅しんらよよ

ああひひとといいひひああららつつてて死しぬぬ 新羅の使り 故云余

天皇てんかう贄ひるる大連おほつら糠ぬか手て子こ連つらよよみみここののりりてて

小郡せうぐんのの西せいののほほりり 収葬丘かみのの前まへよよ しほ

妻つま子こ水みづ手てホほととよよてて石川いしかわよよ しほ

大伴おほつら糠ぬか手て子こ連つらををいいりりてて しほ

ととききんんををいいりりてて石川いしかわのの百濟ひやくせい

の村むらよよ しほ

使

新羅の使り

収葬

しほ

居

夢

の村むらよよ しほ

阿田村あでむらよよ しほ

まままま しほ

信しん 推回

官くわん しほ

まま しほ

まま しほ

まま しほ

てて しほ

任情

艾跡

しよのとき葦水の君も交てこれよりして  
稱賣嶋より投日羅とあり北に  
うはしき後海畔の者の云忍卒が船  
と風りあひて海よりしよき参官の船は津  
津よそひてきかきりあてりるも  
得漂泊

十三年春二月ころのこの朔の日  
難波吉木蓮子と使して新羅よき人  
はしよ任那よりゆき秋九月百濟よりき

きり鹿深尾名を弥勒石像一軀りしり依  
伯連名を佛像一軀りしり彌我  
馬子宿称の佛像二つらと請てをし  
ら鞍部村に司馬達木と池田直氷田とつ  
ひりて四方よりき終行者不負しこ  
こよこ、そりすの国よりしよの者名ハ高藤の  
惠便と得り大匠僧還俗しり師とて司馬  
達等々むを嶋と度せりめり善信尼と  
ふ十二歳又善信尼の才子二人度そよ一

を漢人夜菩うむの豊如名と禪藏尼と  
ふその二、錦織壘がむを石女名、惠善  
尼とふ馬るなを佛のふりのふは三尼と  
達等とよつてけり衣食もつて佛殿と宅  
の東方につけて彌勒石像とよつて三の  
尼と居清て大會設齋をこのまよ達等  
佛舍利と齋食の上、得つて舍利とて  
馬る宿称よつてまの馬る宿称試みるみよ

舍利とて鐵質中よおきて鐵錘と振て  
その質と鋸ととくくふく舍利と  
くくけきころもれ又舍利と水と投て舍利  
この福つるまよ水ようまは是う  
馬る宿称池田氷田司馬達等佛のみり  
子宿称まき石川の宅、佛殿を川ま佛  
の法もつてうけりおん

十四年春二月はよの禪の朔うつの日

獲我大臣馬子宿禰塔を大野丘の北より  
大會役斎をまじりて達等りえりり舎  
利より塔のまじりて頭におさむかのまのい  
の日獲我大臣や<sup>患疾</sup>しと者よふと者こ  
ゆつて云父のときよあがのて<sup>宗</sup>いもつ佛神の  
心より大臣をれより子才とてまらつてそ  
の白杖と養もみとめりてのまらつて  
と者のまらつてよ父の神をいもつと大  
臣みとめりてをうけとまらつて石像とるま<sup>祭詞</sup>  
<sub>禮</sub>

あつて壽命を延んこととをまるとまらつて  
は疫疾おらつて民死ものおらつて三月ひの  
とのまの朔の日物部弓削守屋大連と中臣  
勝海大夫と奏してまらつて人のゆり  
はらまらつていこととめりてはさう考天皇より  
陛下よをよんて疫疾あつておらつて国民  
のまらつてあま専ら<sup>流行</sup>疫疾のまらつて  
佛法をかしかころふよりまらつて  
てのまらつてるまらつて佛法をやめよ  
<sub>物然</sub> <sub>断</sub>

ひのいぬの目 物部弓削守屋大連 三つ寺  
よひつて 胡床よき 踏坐らして けてその塔を研  
ふつて 火をくけて こんどをやく 并佛像と  
佛殿とをくきて きてより けてわきあへり 佛像  
とくく 難波 けいへい きてく じふの日雲  
なつて 風ふきぬ 大連 ありき せう  
馬子宿禰とくく 後 法おこす 侶とせめて  
やふり 毀辱 心とくく じふをいへり 佐伯  
造御室 於同殿 馬子宿禰のい

善信木の尾とくく 是より 馬子宿禰  
命よえくく へい じふをいへり 尼木  
とくく 出て 御室よき 司をいへり  
尼木の三衣とくく じふをいへり 海  
石榴市の亭よき 焚 堀 天皇仕那  
とくく へい じふをいへり 坂田耳子王とくく  
けいへい じふをいへり 属 つて 天皇と  
大連 じふをいへり 瘡とくく けいへい じふをいへり  
とくく へい 橋 豊日皇よき じふをいへり





秋八月きよのころの朔つきの日の天皇

やまひつりして大殿の前にまゐりて大蔵の官と廣瀬の馬を宿禰大目を討つて誅す

さてまつ物部弓削守屋大連あさひの次は弓削守

咲て云猶箭あつ雀鳥のこもの次は弓削守

屋大連とあはしの子は誅すてまつ

馬子宿禰大目咲て云鈴をかつて是をよめて

二の目はわくやくはうをとるや三輪君は逆を

や人をして殯をあはしのとをぐむ穴穂部

皇はあめのことをとりんとおほてつくて

ては何ゆくを死なまして

王の庭につくまはりて生まれし王のみりとし

はらまつていん

日本書紀卷第二十一

橘豐日天皇

泊瀬部天皇

用明天皇

崇峻天皇

日本書紀卷第二十一

橘豊日天皇

用明天皇

橘豊日天皇ハ天國杵開廣庭天皇の第四子

母とい堅塩媛とまらむ天皇佛法と信

とまむ神道とつとひひとまらむ十四年秋

八月淳中倉太珠敷天皇崩す九月

のしころの朔つきの日の日天皇ありつひ

あらむ磐余よるやほろろ流ふまらむ

池也雙槻宮とまらむ我馬子宿社とて

大屋と物部弓削守屋連を大連とす

なまびよりのまのしづのさきの日人との

て行勢の神宮は汗して日神のまつりを

はのまつりせん

よひのみと天皇后のひびんとさより炊屋

姫天皇の世よとふま日神のまつり

うまつり流りまのりつに退りて

炊屋姫天皇記よる或本云三十七年の

間日神のまつりまつりてまつり退

りて

元年春正月三つに祢の朔の日

穴穂部間

人皇女を立て皇后とす是四男と生

まをり其一を厩戸皇女

或云法

とす

後よ斑鳩うつりて

豊御食炊屋

姫天皇の世よみよる

万の機

とふまのまつりて

行天皇

豊御食炊屋姫天皇紀一の其二と来目皇  
子とまほし其三と殖宋皇子とまほし其四と  
茨田皇子とまほし其五と  
石寸名とまほし殖  
皇子とまほし  
一男一女とまほし  
これ當麻との先より女を酢香玉姫皇女と  
まほし三代とまほし日神とまほし  
交五月穴穗部皇子炊屋姫皇后を  
高城直磐村にまほし廣子  
更後  
豊浦

いとまほして一ひてりりのるや入給山寵  
自後  
臣三輪君逆それら兵衛とめて宮門と  
てのそはく何人うらよも入つる兵衛とまほ  
三輪君逆まほし七つひりけとまほ  
穴穗部皇子大臣  
と大連とまほしりてのそはく  
まほしりひの度よ一のひととまほしつてまほ  
くみをとまほし荒  
朝度  
申  
鏡の

おりののこし<sup>西</sup>臣かまむけつまつんとふれ  
ちり是礼<sup>西</sup>し<sup>西</sup>まに<sup>西</sup>下<sup>西</sup>天皇の子オ多<sup>西</sup>人  
つう<sup>西</sup>西の大臣<sup>西</sup>も<sup>西</sup>つ<sup>西</sup>誰<sup>西</sup>う<sup>西</sup>ほ<sup>西</sup>い<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>専<sup>西</sup>う  
つ<sup>西</sup>まつ<sup>西</sup>んと<sup>西</sup>まつ<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>と<sup>西</sup>海<sup>西</sup>人<sup>西</sup>入<sup>西</sup>余<sup>西</sup>り<sup>西</sup>りの<sup>西</sup>内  
と<sup>西</sup>え<sup>西</sup>と<sup>西</sup>お<sup>西</sup>と<sup>西</sup>と<sup>西</sup>ふ<sup>西</sup>も<sup>西</sup>ひ<sup>西</sup>て<sup>西</sup>ゆ<sup>西</sup>り<sup>西</sup>い<sup>西</sup>れ<sup>西</sup>え<sup>西</sup>う<sup>西</sup>  
ら<sup>西</sup>門<sup>西</sup>あ<sup>西</sup>け<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>せ<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>よ<sup>西</sup>ん<sup>西</sup>も<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>の<sup>西</sup>保<sup>西</sup>を<sup>西</sup>  
く<sup>西</sup>い<sup>西</sup>い<sup>西</sup>れ<sup>西</sup>を<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>ろ<sup>西</sup>と<sup>西</sup>お<sup>西</sup>ふ<sup>西</sup>ふ<sup>西</sup>の<sup>西</sup>大<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>ら<sup>西</sup>き<sup>西</sup>  
み<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>の<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>に<sup>西</sup>ち<sup>西</sup>中<sup>西</sup>い<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>の<sup>西</sup>穴<sup>西</sup>穂<sup>西</sup>部<sup>西</sup>皇<sup>西</sup>子<sup>西</sup>ひ<sup>西</sup>そ<sup>西</sup>  
よ<sup>西</sup>あ<sup>西</sup>め<sup>西</sup>の<sup>西</sup>い<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>王<sup>西</sup>と<sup>西</sup>と<sup>西</sup>を<sup>西</sup>謀<sup>西</sup>ら<sup>西</sup>う<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>の<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>ら<sup>西</sup>き<sup>西</sup>

と<sup>西</sup>ち<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>つ<sup>西</sup>つ<sup>西</sup>つ<sup>西</sup>て<sup>西</sup>逆<sup>西</sup>君<sup>西</sup>を<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>ろ<sup>西</sup>と<sup>西</sup>と<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>ら<sup>西</sup>き<sup>西</sup>  
つ<sup>西</sup>り<sup>西</sup>は<sup>西</sup>ひ<sup>西</sup>は<sup>西</sup>物<sup>西</sup>部<sup>西</sup>守<sup>西</sup>屋<sup>西</sup>大<sup>西</sup>連<sup>西</sup>と<sup>西</sup>兵<sup>西</sup>を<sup>西</sup>ひ<sup>西</sup>き<sup>西</sup>いて<sup>西</sup>  
磐<sup>西</sup>余<sup>西</sup>の<sup>西</sup>池<sup>西</sup>也<sup>西</sup>を<sup>西</sup>か<sup>西</sup>む<sup>西</sup>逆<sup>西</sup>君<sup>西</sup>と<sup>西</sup>知<sup>西</sup>て<sup>西</sup>三<sup>西</sup>端<sup>西</sup>の<sup>西</sup>  
丘<sup>西</sup>よ<sup>西</sup>り<sup>西</sup>ぬ<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>の<sup>西</sup>日<sup>西</sup>の<sup>西</sup>夜<sup>西</sup>守<sup>西</sup>ひ<sup>西</sup>そ<sup>西</sup>う<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>ら<sup>西</sup>き<sup>西</sup>  
出<sup>西</sup>て<sup>西</sup>き<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>の<sup>西</sup>宮<sup>西</sup>よ<sup>西</sup>り<sup>西</sup>ぬ<sup>西</sup>炊<sup>西</sup>屋<sup>西</sup>姫<sup>西</sup>皇<sup>西</sup>后<sup>西</sup>の<sup>西</sup>列<sup>西</sup>業<sup>西</sup>  
市<sup>西</sup>宮<sup>西</sup>の<sup>西</sup>逆<sup>西</sup>の<sup>西</sup>同<sup>西</sup>姓<sup>西</sup>白<sup>西</sup>提<sup>西</sup>と<sup>西</sup>横<sup>西</sup>山<sup>西</sup>と<sup>西</sup>逆<sup>西</sup>君<sup>西</sup>と<sup>西</sup>左<sup>西</sup>發<sup>西</sup>  
と<sup>西</sup>穴<sup>西</sup>穂<sup>西</sup>部<sup>西</sup>皇<sup>西</sup>子<sup>西</sup>よ<sup>西</sup>は<sup>西</sup>け<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>ら<sup>西</sup>き<sup>西</sup>守<sup>西</sup>屋<sup>西</sup>  
大<sup>西</sup>連<sup>西</sup>を<sup>西</sup>こ<sup>西</sup>の<sup>西</sup>ま<sup>西</sup>ら<sup>西</sup>き<sup>西</sup>

或<sup>西</sup>木<sup>西</sup>と<sup>西</sup>穴<sup>西</sup>穂<sup>西</sup>部<sup>西</sup>皇<sup>西</sup>子<sup>西</sup>と<sup>西</sup>泊<sup>西</sup>瀬<sup>西</sup>部<sup>西</sup>皇<sup>西</sup>子<sup>西</sup>と<sup>西</sup>あ<sup>西</sup>い

あつりて専屋大まをまきん  
汝ゆきて逆君并其二のよと討し 大連つ  
升はほのものとひきめてゆく 獲我馬る宿  
祢外より、ものうりごとを引て皇子の所よ  
まきでしむまのら門底のあひぬ 皇子のおのり  
まきよ大連の所よゆくとのまきよひきめて云  
王者刑人よりうつるまのらゆきまひ  
皇子ゆきし宿をまきてゆき宿馬子宿祢  
まのらゆきし宿をまきてゆく 磐余よ、うつりて

池巴行 あゐ ま あ 皇子 あ まのら あ い あ ことめ  
のまよ あ まのら あ まのら あ 知 あ 胡床 あ まのら  
う あ けて あ 大連 あ を あ まのら あ 宿 あ 大連 あ や あ ひ あ ごとく  
して あ 宿 あ を あ ひ あ きて あ い あ う あ けて あ くら あ 命 あ ち あ け あ じ  
て云 あ 逆 あ 宿 あ を あ ころ あ ー あ お あ 人の あ

或木云 穴穂部皇子 あ まのら あ 行 あ て あ い あ ころ あ 宿  
うよ馬子宿祢 あ い あ 然 あ 類 あ 歎 あ ひ あ て あ 云 あ 天下 あ の あ 乱  
ひ あ ー あ 大連 あ ち あ けて あ こ あ ー あ て あ 云 あ 汝 あ 小 あ 臣  
あ あ 志 あ する あ 所 あ 多 あ ー

北三輪君送<sup>り</sup>、<sup>お</sup>譯<sup>は</sup>詔田天皇<sup>めく</sup>に<sup>お</sup>すして

籙愛

とくく内外の事とゆゑに<sup>い</sup>く<sup>ん</sup>は<sup>か</sup>是

より<sup>う</sup>り<sup>て</sup>炊屋<sup>の</sup>姫<sup>は</sup>皇太后<sup>と</sup>馬子<sup>は</sup>宿禰<sup>と</sup>り

穴穂部<sup>の</sup>皇子<sup>を</sup>こう<sup>に</sup>流<sup>す</sup>

ことごとくひのえうら

二年夏四月さのよのの朔ひの<sup>い</sup>は<sup>の</sup>日<sup>に</sup>新

嘗と<sup>い</sup>言<sup>ふ</sup>余<sup>の</sup>河上<sup>に</sup>に<sup>り</sup>て<sup>は</sup>天皇<sup>お</sup>

ほ<sup>ん</sup>ら<sup>ら</sup>そ<sup>こ</sup>る<sup>に</sup>ひ<sup>ら</sup>き<sup>の</sup>宮<sup>よ</sup>ろ<sup>う</sup>か<sup>さ</sup>ま<sup>ん</sup>

得病

うちま<sup>ん</sup>り<sup>て</sup>ち<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>り<sup>て</sup>天皇<sup>も</sup>ち<sup>ま</sup>り<sup>て</sup>ち<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>り<sup>て</sup>

ひのよのの<sup>い</sup>は<sup>の</sup>日<sup>に</sup>新<sup>は</sup>朕<sup>の</sup>三<sup>の</sup>室<sup>に</sup>も<sup>り</sup>た<sup>り</sup>て

ま<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>い<sup>し</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>を</sup>ち<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>り<sup>て</sup>ま<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>

ち<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>り<sup>て</sup>ま<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>い<sup>し</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>を</sup>ち<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>り<sup>て</sup>ま<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>

中<sup>の</sup>臣<sup>は</sup>膳<sup>海</sup>連<sup>と</sup>み<sup>を</sup>の<sup>を</sup>と<sup>ら</sup>て<sup>て</sup>他<sup>の</sup>神<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す

う<sup>ま</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>國<sup>の</sup>神<sup>と</sup>を<sup>し</sup>り<sup>て</sup>他<sup>の</sup>神<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す

ひ<sup>ら</sup>き<sup>の</sup>宮<sup>に</sup>も<sup>り</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>の<sup>の</sup>事<sup>は</sup>の<sup>よ</sup>う<sup>に</sup>も<sup>り</sup>た<sup>り</sup>て

籙我馬子宿禰大臣ま<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>い<sup>し</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>を</sup>ち<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>り<sup>て</sup>ま<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>

く<sup>ん</sup>は<sup>は</sup>か<sup>の</sup>し<sup>の</sup>と<sup>り</sup>て<sup>は</sup>ま<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>い<sup>し</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>を</sup>ち<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>り<sup>て</sup>ま<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>

皇<sup>の</sup>才<sup>の</sup>皇<sup>と</sup>皇<sup>の</sup>才<sup>の</sup>皇<sup>と</sup>皇<sup>の</sup>才<sup>の</sup>皇<sup>と</sup>皇<sup>の</sup>才<sup>の</sup>皇<sup>と</sup>皇<sup>の</sup>才<sup>の</sup>皇<sup>と</sup>



豊国法師名をとを引て内表かたちまひつ物部

守屋大連即暇下大想よ時押坂部

更毛原急あきりてきつてひそ蜜よ大連あまひつ

て云、いさしちきりしら郷番とさつてさつてさつて

路とさつて人断大連これと関てとさつて河都

は退て河部ハ大連ハ別業人とあつて中うき臣

勝海連家いづとあつて大連よしとひい

よくはひよ太子うき疾人皇子の像と竹田皇うき又

の像とつてつてまふ威ふ志威つて事

の海うきつて人うきをもと知てつて疾人皇子の

水流宮うきの附舎人迹見赤檣迹見ハ姓赤持名勝海

連の疾人皇子の所うき退うきつてひて刀うき

ぬいて教うきつ大連阿都の家うき物部ハ

坂うき太市造小坂漆部造うき兄うきとまうき馬子大

臣うきよつてつて云吾うききりつてつてつて家と

つてつてと我故うきの馬子大うき臣うき

太師ハ海連うきと大伴毗羅夫連うきの所うき

つてつて大連うきのうきのうきのうき毗羅夫

連キはゆえや皮楯くわだてととりて槻曲つきまがの家いへのゆき  
 てひらくころとせしむる大庄おほしらとまじりて  
 天皇のまやまひたかおひりておほしむる人ひととん  
 時とき鞆部たづなべ多須奈たすな 司馬しりま 等ら 人ひと 下した せりして  
 まうさく居い 天皇のおけんおきなの家いへていまね  
 こねん又丈六ぶちろくの佛像ぶつぞうとよむ寺てらをつくること  
 まうじん天皇てんおうのいまひひとささいいまの南みなみ  
 淵ふちの坂田寺さかたでらの丈六ぶちろくの佛像ぶつぞう狭侍せうじ意降いげ足  
 かりかりいつのいつののううししのの日ひ 天皇てんおう大殿たいでんと崩くずれまへ

七月しちがつののいぬいぬのの刑けいののいいままのの日ひ 磐余いひよのの池いけ  
 上かみのの陵みささぎと葬おくりなまう

泊瀬部登

崇峻天皇

泊瀬部天皇ハ天用排用廣庭天皇才十二

子なり母を小姉君とま

稻目宿禰のむすめ  
やまきりとの女よめ

二年交四月橋豊日天皇崩凡五月物部

大連軍元三度登坂大連余皇子

等とまて穴穂部皇女とて天皇と人

みりふいさよいさよとて遊衛とて

こころをくまなてとて望て

人を穴穂部のみりよとて

新くくく、皇まゝと淡路よりあせんとまきいさ

世ぬ六月きめしらの判りのいぬの口

獲我馬子宿孫ら炊屋姫尊のみことりうとう

々たすもうて依伯連丹经手土師連磐村

的良真噓ま云いしころつものときをひて

ええやうまゆきて穴穂部のみま宅部のみま

とまころまの日の夜中、依伯連丹经手土

穴穂部のみまの宮をかこめうこま

よまのまの上まのほうて穴穂部のみまの肩

とうの皇まゝくまの、下まおちて

よにけ入めふ赤士らひとりてころへか

のまのいの日宅部のみまころへ

天皇のみま上女王のまきま

まきのみの日善信阿尼ホ大匠よか

云出おの途い戒まて本ん福のつくを百

濟まゆきて戒法をまぬいみんこの月ま

らより調のつひまらう大匠つひ

よころて云まの尼等とひきて汝の国よわ

いふて 戒法をまひぢうのおうらうん

あまのせつしんて云 臣才蕃よりて

まき、国王よまかりしてのらよこちまきと久

くともそえし 秋七月 籙赤馬子宿称大

臣みちちしもちきとちしとちしとて 物部

守屋大連をほろわうんととて 泊瀬部皇

子竹田のみ、厩戸のみ、新波のみ、春日のみ、

そがのむらよみきとのみほいすらき、紀臣磨

宿祢巨勢臣比良丈膳臣買抱丈葛城臣島那

丹とりのいふとひきあて ぞんて 大連をら

大伴連 嗟の倍臣人 平群臣 神手坂木臣 糠手

春日臣 名をいふとひきあて 一記のこ

ほろわうら 志の川の家より 大連をらや

とと 奴軍ととひきあて 穰城をつきてとふ

とと 大連ののきのととよのほろて のそ

とととあめのみと 其いこつとくさうん

あよこり 野とあつらみこちよいこ

ちきこいらのいこしおそい

ひしつろくこよの時一既<sup>うまや</sup>たのみとひさこころし

束髪<sup>うづり</sup>記<sup>し</sup>類<sup>る</sup>

古俗年少児年十五六のあひりひこころしんいさの  
十七八の万いりけてあけまきには今しきつり

後<sup>うしろ</sup>うしろとひつるうしろとひつるの

まこよやうしろとひつる願<sup>ねが</sup>ひあひ成

るうしろとひつる白膠<sup>くわく</sup>木をさうりとうそ

天王の像<sup>ざう</sup>とつろつ頂<sup>うへ</sup>髪<sup>かみ</sup>を置<sup>お</sup>て拍<sup>う</sup>言<sup>ご</sup>をたじ

てのうしろとひつる家<sup>いへ</sup>とて歌<sup>うた</sup>うろし

流<sup>なが</sup>るうしろとひつる護<sup>ご</sup>世<sup>せ</sup>四天王のおけんとあ

寺<sup>てら</sup>塔<sup>たつ</sup>とくそん<sup>そん</sup>獲<sup>と</sup>家の馬子大臣<sup>まじ</sup>まじうきいとあ

してまじうろくおろく諸<sup>しよ</sup>天王<sup>てんわう</sup>大神<sup>おほじん</sup>王<sup>わう</sup>等<sup>とう</sup>家<sup>いへ</sup>と

てまじまじうろく利益<sup>りやく</sup>とえそりぬくぬく

こよ諸<sup>しよ</sup>天<sup>てん</sup>と大神<sup>おほじん</sup>王<sup>わう</sup>とあま寺<sup>てら</sup>塔<sup>たつ</sup>をさ

て三<sup>さん</sup>宝<sup>ぼう</sup>とつろんとうけひおろく種<sup>くさね</sup>の

ほろりのおとまじうろくそんてうの<sup>うの</sup>家<sup>いへ</sup>と迹<sup>あと</sup>見<sup>み</sup>

首<sup>くび</sup>赤<sup>あか</sup>持<sup>もち</sup>大<sup>だい</sup>連<sup>れん</sup>を枝<sup>えだ</sup>下<sup>した</sup>にいぬて大<sup>だい</sup>連<sup>れん</sup>并<sup>なら</sup>そ

の子<sup>こ</sup>赤<sup>あか</sup>とこりてほろり大<sup>だい</sup>連<sup>れん</sup>のいさた

ちまらうやうれぬいさこころくやうく<sup>くろきみ</sup>に皂<sup>そう</sup>衣<sup>い</sup>

ときてうろくろくひろせの可<sup>か</sup>ろ原<sup>はら</sup>

馳<sup>ち</sup>捕<sup>ほ</sup>

廣<sup>ひろ</sup>腹<sup>はら</sup>

句<sup>く</sup>

散ぬよの役そとら大連の兒息こころと眷属けんじゆくとあはひ  
とああ原はらよめききと姓なづなとああと名なを  
かひかひのありあはひあはひとううせせて向むかへ人  
而しかとと時ときの人ひとああひひとと云い獲と我われ大臣おほしの  
妻つとは是こゝ物部ものべ守屋もりや大連おほしの妹あねなり大臣おほし  
妻つとのこゝ計けい大連おほしをこゝととり平乱ひららん  
てのち法ほの国くに四天王しつてんわう寺てらをはくくり大連おほしの奴やつこ  
半はんと宅たくととととけけ大寺おほてらの奴やつこ田庄でんじやうとと法ほ  
田でん一いつ万まん頃ころをとり迹見あとみ首くび赤あか檣じやうととすす獲と我われ

大臣おほしもも亦また願ねがひひもも飛鳥あすかの地ち法真ほつま寺てら  
とといいく物部ものべ守屋もりや大連おほし資人すけひと捕鳥とらと部べ萬まん  
一いつ百人ひゃくにんととひひききひひ難なん波なの宅たくをとりり  
と大連おほしほほくくとと閑ひま下した馬うまのの夜よととげげ茅ちやう  
停とどの縣ごほゆゆき真香まかうの邑むらとと人ひとととりり  
婦つまの宅たくととりり法ほひひとと山やまのの朝あさ庭てい  
ううりりててののままととりり可よきき心こゝろととりり故ゆゑのの  
山やまの中なかととりりととりりととりりととりりととりりととりり  
かかととりりととりり衣い裳ももややままああつつ形かたち色いろののけけ  
弊へい垢か推おし坪つら

弓とち<sup>ゆ</sup> 釘<sup>くわ</sup>と<sup>ち</sup> ひる<sup>ろ</sup> ち<sup>ら</sup> 出<sup>で</sup>  
有司<sup>つとく</sup> 救<sup>すく</sup>而<sup>を</sup>よ<sup>り</sup>ひ<sup>と</sup>を<sup>あ</sup>ま<sup>し</sup>け<sup>り</sup> 萬<sup>ま</sup>と<sup>が</sup>

む万<sup>も</sup>を<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>ね<sup>ら</sup>ま<sup>て</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>し</sup>て<sup>ら</sup>な<sup>り</sup>

と<sup>の</sup>何<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>ひ<sup>ま</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>て</sup>他<sup>た</sup>と<sup>て</sup>さ<sup>お</sup>

っ<sup>は</sup>入<sup>い</sup>ふ<sup>と</sup>と<sup>を</sup>い<sup>く</sup>ひ<sup>と</sup>あ<sup>ご</sup>は<sup>り</sup>す<sup>も</sup>

て<sup>ら</sup>う<sup>く</sup>行<sup>ゆ</sup>を<sup>さ</sup>て<sup>て</sup>云<sup>を</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>あ</sup>り

万<sup>ま</sup>を<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>箭<sup>や</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>ふ<sup>と</sup>

ひ<sup>い</sup>く<sup>さ</sup>ひ<sup>と</sup>お<sup>そ</sup>れ<sup>て</sup>あ<sup>つ</sup>て<sup>ら</sup>う<sup>を</sup>

万<sup>ま</sup>を<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>と<sup>を</sup>い<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>ひ<sup>と</sup>を<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>て<sup>山</sup>

む<sup>ら</sup>う<sup>く</sup>と<sup>ち</sup>の<sup>く</sup>木<sup>き</sup>に<sup>ら</sup>を<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>河<sup>か</sup>を<sup>夾</sup>

て<sup>お</sup>つ<sup>て</sup>ゆ<sup>い</sup>に<sup>あ</sup>て<sup>る</sup>に<sup>は</sup>ひ<sup>ら</sup>の<sup>い</sup>

く<sup>さ</sup>ひ<sup>と</sup>を<sup>人</sup>つ<sup>り</sup>と<sup>を</sup>せ<sup>て</sup>万<sup>も</sup>を<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>

ち<sup>て</sup>河<sup>の</sup>の<sup>ほ</sup>う<sup>に</sup>あ<sup>つ</sup>て<sup>射</sup>を<sup>さ</sup>ら<sup>う</sup>ひ

て<sup>ひ</sup>ご<sup>の</sup>あ<sup>つ</sup>る<sup>万</sup>を<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>箭<sup>を</sup>あ<sup>ま</sup>し<sup>て</sup>

ち<sup>う</sup>り<sup>の</sup>箭<sup>を</sup>も<sup>つ</sup>地<sup>を</sup>あ<sup>つ</sup>て<sup>し</sup>ら<sup>ひ</sup>て<sup>云</sup>

天<sup>てん</sup>皇<sup>わう</sup>の<sup>楯</sup>な<sup>ら</sup>ひ<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>人</sup>

ち<sup>う</sup>り<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>ひ<sup>ら</sup>の<sup>を</sup>い<sup>ら</sup>う<sup>て</sup>か<sup>ら</sup>い<sup>て</sup>

ち<sup>う</sup>り<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>ひ<sup>ら</sup>の<sup>を</sup>い<sup>ら</sup>う<sup>て</sup>か<sup>ら</sup>い<sup>て</sup>

ち<sup>う</sup>り<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>ひ<sup>ら</sup>の<sup>を</sup>い<sup>ら</sup>う<sup>て</sup>か<sup>ら</sup>い<sup>て</sup>

窮





此是よき事なりやう墓を有真香のひらる  
之はくうて万と大とをきく河内国より  
うきく餌香のひらるよしきく人ありひき  
うき救百人頭身志下よしきく姓字知  
かす但衣のいろをひきその身をおこめ人  
爰は橋井の田部連膽淳のつる大あり身  
頭をくいつけて側よしきくうきくまの  
ゆきぬ八月のよきぬの荆きのひらるの日炊  
行

屋姫尊とまぢきささちきめりてまうら  
て天皇あまつひつしうりぬ藤我馬る宿  
福より大臣しうらぬのまらき  
あつ位ゆきしゆのまらき  
あつ位ゆきしゆのまらき  
あつ位ゆきしゆのまらき

元年春三月大伴糠手連のむをふ十手  
子と立て妃と泣き埒子皇子と錦代皇子  
と生ませりし百濟国よりつひ并僧  
惠拾令行惠宴ホとまらき佛舍利とて

まつ百洲の国より恩平首信徳平益久那平  
福曾味身ホとまもつて調并佛舍利僧聆  
昭律師令威惠衆惠宿道藏令閑等寺工  
太良未大文賣古子信盤博士将徳白味淳尾  
博士麻奈入奴陽貴又凌貴又昔麻帝許  
畫工白加とつてまつそよむすこのまもり百  
洲のほつと請て戒とつくる法をといひて善  
信尼おとつてくつこの国のつらひ恩平首  
信らよ付てりるまひよとつとつていひ飛鳥  
字曰 飛鳥 飛鳥

の衣縫造祖樹葉の家をいほりてつてあて  
法真寺をほくるこの地を飛鳥の真神原とら  
ほくまよの名あそこの菅田こつと大成成申  
二年秋七月乙のこのの朔の日あまのほ  
満と東山道よまもつてまの国のさつといひ  
みまもつて完人臣鷹と東海道よまもつて  
東方の海よまもつてくはくめこひをみせしむ  
阿倍臣と北陸道よまもつて越ホのくめこの  
こひをみせしむ

三年春三月壬午の尼善信あまのちからくわんよ

月つきりりさく井の寺いづみの寺てらにて冬十月山やまり入いて

寺てらの材まをとるも一度いちどもく尼あま大伴おほとも狭せ衣い

連つらりもの善徳ぜんとく拍夫人はつふじん新あらた延のぶ媛ひめ善妙ぜんめう百濟ひやくせい

媛ひめ妙めう光こうもの漢人あまのこ善ぜん徳とく善ぜん通とう妙めう徳とく法はふ定じやう照せう

善ぜん智ち聡そう善ぜん智ち惠ゑ善ぜん光こう亦また鞍部あなぶ司馬しま建けん等ら

子こ多た須奈すなあまりしきよよの出い家け一いつ名なをと徳とく奇き百ひやく

一いつとしつつ

四年夏四月壬午のし新あらたの朔しやくきのひ新あらたのひ譯おとこ詰つめ

曰い天皇てんかうをと磯長陵いそながのりやう葬まうすは是この其その姓せい皇后こうごうの

葬まうすは後のち秋八月あきはつのひいぬいぬの朔しやくのひ

天皇てんかうままららききここららよよみみととののししててののままりり

朕みづか任に那なをとてて人ひとをとめめふふいいししここららいいんんにに

ららままりりししててすするるにに任那にんなのの官くわん家けをと

ててののままりりんんととみみれれ陛へい下げののみみののししにに給たまふふよよ

同どうししととままりりししてて冬十二月ふゆにじふにがつつつちちののととのの朔しやくのの

ええむむすすのの日ひ託男たくなん麻呂まろ宿禰すくね巨勢こせ比良ひら吏し狭せ衣い

大伴おほとも咄つた連れん葛城かつらぎ鳥とり余あま良ら房ふさをとてて大將軍おほいさむら

して氏この長連をひきめて 禪将部隊しんしょうぶたいとし

て二ふた餘あまのいくとていさめておてつくつくよま

つ吉士金きちしきん 新死吉士木蓮きちしきんよ

任那じんなよま 新死よま 新死よま

五年冬十月えのしのつらの朔しつらひの移

日ひ山猪やまじとてまつひとあり天皇猪てんかうじとて

みともりしてのまきく川がわものまきう北

猪じのくびとまきくよ朕みづかり移うつり

人ひととて多おほつりよとまきけ移うつふと常とこ

よ異ちがることありえのしむきの日獲我馬わがうま子宿

祢天皇ねてんかうのみとありし移うつりてうけし可べらう

おのれを移うつりてや 僅者ひととまきあつめ

ととおそりて天皇てんかうと移うつりてまきあつめ

この月大法ほう興寺きやうじの佛堂ぶつどうと歩廊ほろとて

十月じゅうがつこのよみの朔しつらよみのこの日ひひりあ

くまらくまらとてあつて云い今日けふ東国あづまより

つきていってまつてまきあつめ 東漢直助とて

して天皇てんかうとてううてまつ

或本云 東漢直駒ハ東漢並磐石中子

この川天皇と倉村の因の後に葬す

或本云 大伴嬪小羊子めくらみおとら

うみ人そえがのあまのそとみひのり

まして云この山猪をとてまら

あり天皇みりしとさしてみよめ

のまきくみりのくみを断り

いつよときう肢あふ人と斬人ま内哀

よ入よつりよとおくはふとこま

きよひきておとら

ひのよひほりの日驛ついでに將軍

のりよまよして云内乱うらうけ外の事

そらお急うらうけの月東漢直駒ひきり

くして獲我娘媛河上娘と妻は河上媛

馬子宿禰くちあはる河上娘駒うら

なゆゆいとあきして死去りあがり駒

嬪をかきるとあきりて大后のこめ

いぬ

